

編集後記

今年も無事『探求』を発行することができた。編集担当としてはそれだけで十分であり、ことさらそれ以上に語るべきものはない。ただ、既に精読されたであろうレクチャー論文と個人研究発表論文が読者の方々の刺激となつたであろうと期待するのみである。そういうわけで、ここではあえて個人的な感想を述べさせていただきたい。

今号もまた多様な知的問題が登場している。それは明白として、もう一つ興味深かったのが論文において挙げられている様々な例である。高度に抽象的な議論を具体化するために有用ということ以上に、その内容を改めて眺めてみると、それぞれの論文ごとの特色がなんとなく透けて見えてくる。もちろんこれらは各々の研究領域に典型的な例文である場合もあり、その意味で各知的問題そのものとの連関も見出すことができるであろう。しかしそれ以上に、いかなる例を挙げたのかという点において、知による言葉を通して哲学する者としての執筆者のあり方が浮かび上がっている印象を受けた。また、今号は全体として、各論文の言葉の「癖」はなるべく尊重するよう心がけた。こうした個性という観点から通説していただくのもよいかかもしれない。

最後に、今号の編集に際して多くの方々にお力添えいただいた。特にお忙しい中ご寄稿くださいり、また編集過程においてもご親切にご協力いただいた執筆者の方々には、心よりお礼を申し上げたい。

(編集 平賀 直哉)